

——「権力的なものへの想像力」と「距離」

—シンポジウムを終えての実感

瀧 大知 和光大学大学院

今回のシンポジウムは現在の日本社会への憂いが形になったものであり、かつて闘った人々の運動を通して、もう一度、我々はどのように「市民的不服従」「共生」を取り戻すのか？ という命題が突き付けられたのだと感じた。

特に第1回目の「指紋押捺拒否闘争」は、その当事者の生の声を聞いたことに強い衝撃を受けた。日本の差別的な管理政策、踏みじられる尊厳、登壇されたパネリストの方々、そして客席から発言された当時の運動参加者の冷静でありつつ「叫び」にも似たエピソードや意見は「権力」によって蹂躪される生命の問題を浮き彫りにしたように思う。

会場の迫力を目の当たりにしながら、自分はどこかで登壇者の方々や当時の運動に参加をしていた人々との「距離」を感じずにはいらなかった。

会場で考えたことはその感じてしまった「距離」についてであった。あの空間で感じた「距離」とは一体何なのだろうか？ それはおそらく、テーマである「市民的不服従」と関わる「権力的なものへの想像力」である。同じ空間を共有しつつも、「市民的不服従」と対になる国家を始めとした「権力」というものに対して、登壇者や運動参加者の方々が明確にピントが合っているのに対して、自分の中ではどうしてもぼやけてしまう（だからこそ、「権力的」という表現になってしまう）。

そのように感じたのは自分が日本国籍で本土在住、男、中流（意識を持てる）というポジションがあるからだということは間違いない。しかし、「指紋押捺拒否闘争」当時も多くの「日本人」が参加し明確な「権力」と対峙し外国籍の人々と共に戦い「共生」の道を探っていた。

では、当時の運動に参加していた人々が差別や植民地主義等の問題として認知していたかと言えば推測だが、そうした「他者性」における認知以上に「当事者性」における実感からの行動であったのではないか。

その「当事者性」とは、抑圧によって誰しもが尊厳を蹂躪されるという実感であり、その下では人びとの差異以上にお互いが「権力」と対峙させられてしまう「市民」として「共生」できたのではないか？ だからこそ「三里塚闘争」と「指紋押捺拒否闘争」がポジショナリティに過度に言及する必要がなくとも、一貫性を持って連続のシンポジウムが開催できたのだと考える。

「権力的なものへの想像力」はいつのころからか、大きな変質を遂げたように思う。現在は対峙する対象というよりも、自分たちを安全に護ってくれるものとして想像されているのではないか？

漠然とした不安意識は増加しているように見える。不安感が高まれば、セキュリティ意識が強まる。こうした中で「権力」による監視や管理は、自分達の「安全」を護ってくれるものに転化される。これが現在の日本社会を覆う「権力的なものへの想像力」ではないか？ 批判よりも積極的に導入されるようになった監視カメラの状況を見ると分かりやすい。

こうした「権力的なものへの想像力」という転倒こそが自分が会場で感じて「しまった」「距離」の理由なのではないか？ それは実態の変化を意味しない。あくまで立場や空間的な「距離」であり、「権力」との闘いはヘイト・スピーチの路上、沖縄や福島で実際に起きている。

エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ¹⁾は、「みずから隷従し喉を抉らせているのも、隷従か自由かを選択する権利をもちながら、自由を放棄しあえて軛につながれているのも、みずからの悲惨な境遇を受け入れるどころか、進んでそれを求めているのも、みな民衆自身なのである」(p18) と言う。

投票率は年々減少し、政治への興味関心は薄れていくように見える今の日本社会はまさに「自発的隷従社会」と言えよう。こうした状況に対して巷では変化しない政治に対する閉塞感等から人びとの失望感や諦めが高まり、希望を失っているのではないか？ という論評が聞こえる。

しかし自分たちは失望感を感じ、興味を持ちたくなくてもそこから逃れられない人びとがいることを考えなければならない。差別や排除、抑圧にあっている人びとは逃げたくても逃げるのができない。

安全なポジションにいる人間がすることとは何か？ それは社会にある不正義、不公正を見逃さずに声を挙げていくことであろう。

ラ・ボエシは言う。圧制者に「なにも与えず、まったく従うことをしなければ、戦わずとも、攻めかからずとも、彼らは裸同然、敗北したも同然であり、もはや無にひとしいものとなる、あたかも、根に水分や養分を与えなければ、枝が枯れて死んでしまうようなものだ」(p20) と。特権者はけして持っているその力を売り飛ばし、さらなる差別や排除、抑圧に荷担してはならない。社会を変える責任

1) エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ、山上浩嗣訳『自発的隷従論』筑摩書房、2013年。

は声を挙げる力を持つ人びとにより大きく発生する。そのポジションから逃れたければ、この特権という力でもって不条理な社会を変化させる必要がある。シンポジウムで感じた「距離」を埋めることは容易ではない。だからこそ自分たちはその「距離」を直視する必要がある、勝手に社会を諦めることは許されない。数少ない希望を紡ぎだす責任が我々にはあるはずだ。シンポジウムという場は、その場から発せられたメッセージに自分がいかに応答していくかという、大きな課題を与えてもらったのではないかと勝手ながら感じている。